

〔われらひとしく丘に立ち〕

われらひとしく丘に立ち青ぐるくし
てぶちうてるあやしきもののひろが
りを東はてなくのぞみけりそは巨い
なる塩の水
海とはおのもさとれども伝えてきよ
しそのものとあまりにたがふこゝち
してたゞうつよなるうすれ日にその
わだつみの潮騒のうろこの国の波が
しら
きほひ寄するをのぞみみたりき

〔われらが書に順ひて〕

われらが書ふみに順ひてその三稜の
壇に立ち
クラリネットとオポーもて七たび青
くひらめける四連音符をつゞけ奏な
しあたり雨降るけしきにてひたすら
吹けるそのときにいつかわれらの前
に立ちかなしき川をうち流し渦まく
風をあげありしかの逞ましき肩もて
る黒き上着はそも誰なりし百合を掘
る

百合掘ると 唐鍬トガをかたぎつひ
と恋ひて 林に行けば濁り田に
白き日輪
くるほしく うつりゆれたる

友らみな 大都のなかに入学の
試験するらんわれはしも 身はうち
疾みて
こゝろはも 恋に疲れぬ

森のはて いづくにかあれ子
ら云へる 声ほのかにてはるか
なる 地平のあたり汽車の音
行きわぶごとし

このまひる 鳩のまねして松森の
うす日のなかにいとちさき 百合の
うろこを索めたる われぞさびし
き秘境

漢子称して秘処といふその崖上にた
どりしに樺柏に囲まれて
はうきだけこそうち群れぬ

漢子首巾をきと結ひて黄ばめるもの
は熟したりなはそを集へわれはたど
白きを得んと気おひ云ふ

漢子をのこが黒くろき双の脚大コム
パスのさまなして草地の黄金をみだ
るれば
峯の火口に風鳴りぬ

漢子は葦を山と負ひ
首巾をやゝにめぐらしつ東に青き野
をのぞみ
にと笑みにつゝ先立ちぬ